

## 〔編集後記〕

未曾有の被害と測り知れない影響をもたらした3.11東日本大震災から約4カ月半が経過しました。被災された方々が心身ともに回復に向かわれることと、被災地域の日も早い復興を心からお祈り致します。原発事故に起因する放射能汚染の問題は後を絶たず、現在は放射性セシウムに汚染された稲わらを与えられた牛の肉の回収とその賠償が社会問題となっています。我々も医療に関わるものとして放射線障害についての正確かつ最新の知識を備えるべきですが、不安感が強い一般の方々にそのことをわかりやすく伝えることは容易ではありません。先日、私も関係する遺伝医療の講習会で「放射線被曝への不安が強く、胎児への影響を強く心配されている妊婦の方にどのように対応すべきか」というセッションがありました。講習会には全国津々浦々からの参加者があったのですが、具体的なdiscussionになると福島方面から参加者の発言に圧倒的な現実感と重みがあり、震災後の日々の診療で苦闘されている医師が多数いらっしやることをあらためて感じました。

第87巻第4号には最終講義1編、千葉医学会学術大会の講演要旨、講座1編、原著2編そして歯科口腔外科と臓器制御外科学教室（旧第1外科）の例会の内容が掲載されています。

「放射線治療に従事して」と題する伊東久夫先生の最終講義は私も実際に拝聴しました。これまでに多くの先生方の最終講義を聴かせていただいておりますが、講義にはその先生方のお人柄がにじみ出ることが多く、伊東先生の場合も気負いが全くなく、謙虚な語り口の中にもプロフェッショナルとしての凄さが大いに伝わってくるお話でした。米国における癌研究のメッカであるM. D. アンダーソン病院での留学時代の恩師と共に行われたtumor bed effectに関する研究においては、まだgrowth factorという概念が全く無かった時代に、growth factorを測定できる系を作り上げら

れていたというお話をうかがいましたが、その折に言われた「大発見のチャンスは意外に身近にある」というフレーズが印象的でした。

講座は、石出猛史先生による千葉大学医学部前史－共立病院・公立千葉病院時代－です。著者の言葉をお借りすると、本学医学部は本邦において医学校として3番目に古い歴史を有しているにも拘らず、創立から初期の頃のことを物語る資料は多いとは言えないようで、このような考証は本学医学部にとっても貴重な財産になることと思います。

渡辺東也先生をはじめとする市川市医師会成人病研究会による市川市基本健康診査受診者血清脂質の検討の第3報で今回はnon HDLコレステロールに注目され、メタボリックシンドロームの経過を追うに際してレムナントや小型LDLから構成されるnon HDLにも注意を払うべきと述べています。下山一郎先生らは認知機能を客観的に定量するために、視覚・聴覚・振動覚・左右認識・短期記憶認識における認知反応時間（RT）を計測し、RTが将来的に認知症と健常者の鑑別に有用となる可能性を示されました。

第87回千葉医学会学術大会は平成23年9月8日（木）16時10分より千葉大学医学部附属病院3階第一講堂で開催されます。今回は眼科学教室の前教授と現教授が揃って講演されます。その講演要旨が本号に掲載されます。「眼科学に寄す」と題する安達恵美子先生の特別講演では、ご自身が眼科の道に進まれた経緯から学問としての眼科学の今昔についてお話されます。一方、山本修一先生による「Last Frontierに向かって」ではご専門の網膜疾患領域における眼科治療学の長足の進歩についてお話される予定です。いずれのご講演も魅力的な内容であり、多くの方々のご参加をお願いいたします。

（編集委員 野村文夫）